

諫早直人著

## 『海を渡った騎馬文化』

——馬具からみた古代東北アジア——  
ブックレット《アジアを学ぼう》⑰

風響社 二〇一〇・一一刊

A5 六六頁 八〇〇円

江上波夫氏といえ「騎馬民族征服王朝説」の提唱者であることは、歴史学者以外の幅広い世代の人々にも知られていることと思われる。しかし、そのきわだった独創性のために、戦後学界に新風を吹き込んだ奇説、のようなイメージが先行してしまい、江上氏が同説を提唱するに至った動機、すなわち同説の学術的根拠については忘れられがちではないだろうか。同説発表時に江上氏が挙げた六つの根拠『民族学研究』(一一三—一三三、一九四九年)を総合するならば、古墳時代の前期と後期を隔てる文化的異質性の著しさ、かつ馬匹飼育に代表されるその「異質性」のあまりに急激な到来と拡散、となろう。本書は「古墳時代中期に入ってそれまで馬の存在しなかった日本列島に突然、馬と騎馬の風習が伝来したこと自体は否定しようのない」(はじめに)と江上説の前提には肯首しつつ、「日本国内の「騎馬民族説」を巡る議論は、同時期の中国東北部や朝鮮半島の騎馬文化と、いったい何が共通して、何が違うのか、という本質的議論へとはついに発展しなかった」(同前)

と問題提起する立場から、改めて答えを模索しようとする試みである。

第一章「騎馬文化の成立・拡散と韓国の「騎馬民族説」では、朝鮮半島における馬匹飼育の普及を楽浪郡の設置に求め、当該時期(原三国時代)の馬車や馬具といった馬を巡る文化は基本的には中国由来と考察する一方で、つづく三国時代の騎馬文化は、原三国時代のそれとは区別されるべきとする。著者は「古墳時代中期に日本列島にもたらされた騎馬文化は、朝鮮半島においてもまた、三国時代にもたらされた外来の文化だった」という認識のもと、日本ではほとんど注目されてこなかった韓国「騎馬民族説」の紹介・反駁を通して、四〇六世紀の東北アジア一帯は独自の「裝飾馬具」によって特色づけられる騎馬文化を共有していたと論ずる。この文化圏の北端・西端にして起点と位置づけられるのは、五胡十六国時代の中国東北部に割拠した鮮卑族慕容部の領域である。第二章「古代東北アジアにおける裝飾騎馬文化の成立と拡散」では、慕容部、高句麗、新羅、加耶、百済の各領域より出土した馬具に対する詳細な比較検討を通じて、「裝飾馬具」文化の漸進的南下を俯瞰しつつも、各国におけるその受容と展開の多様さを指摘し、伝播の背景には単一騎馬民族の征服活動といった「民族移動」が介在する余地はない」と断ずる。さらに第三章「日本列島における騎馬文化の受容と展開」において、倭人が導入した初期馬具のルーツを朝鮮半島南部と確認したうえで、月岡古墳から出土した馬具を倭王権内部で製作された「裝飾馬具」最初期の例と考察

し、「国産品」製作の推定開始時期を五世紀前葉へと遡らせる。そして江上説への最終的な反駁として、日本列島に極めて短期間に騎馬文化が定着・普及していく最大の要因は、「高句麗の南下政策を基軸とする当時の東北アジアの国際情勢の中で、受容主体である倭と、供給元である朝鮮半島南部諸国双方の利害が一致したこと」（「おわりに」と総括するのである。ここにとりわけ注目すべきは、慕容部によつて創出された「裝飾馬具」文化は、漢人中国王朝とは異なる独自の世界秩序、正統性を可視的に表象するための手段であり、朝鮮半島諸国や倭は物質としての馬具のみならずその象徴的機能をも受け継ぎ展開した、とする指摘である。編纂物であれ出土物であれ文字史料に専ら依拠しがちな中国史研究者の側からも、改めて検討されるべき視点ではないだろうか。

（板橋暁子）